

第2回とやま未来創生産学官連携推進会議における主な意見

(平成30年6月20日 開催)

- ・骨太の方針2018でも、大学改革と地方創生が、少子化社会への対応のキーワードとなっている。
- ・真の意味での産学官連携の実現に向けて、これまで以上に取り組みたい。
- ・これを契機として、グローバル化、研究、教育といった多方面で活性化させていきたい。
- ・KPI（県内大学卒業生の地元就職数）は、「頑張った年」を基準としており、非常に苦戦しているところ。達成に向けて努力するが、楽な数値ではないと考えている。
- ・プロジェクトは、地方にいても世界レベルの研究開発ができ、世界に通用する技術を創る取組みであり、素晴らしいことである。
- ・人口移動をプラスにするためには、若い女性に地元に戻ってもらったり残ってもらったりすることが重要。性別を意識した雇用の確保を考えるべき。医薬品は女性の多い分野であり、マッチしたテーマだと思う。
- ・（地方大学・産業創生法等については）必ずしも全国民が賛成しているわけではなく、自由競争を是としている方々や、中央の大学や保護者などから就学の機会を奪っているのかという声もある中、こうして新法が成立し、具体的なプロジェクトができたことは心強い。
- ・これまで日本では産学官連携が盛んではなかったが、欧米をモデルとして学べばよかったため、特に大学は産学官連携の必要性を感じなかったのかもしれない。
- ・今や成熟社会であり世界のトップでもある日本では、産学官連携が必要であり、両大学の協力が鍵になると感じる。
- ・業界として大歓迎であり、全力を注いで支援したい。
- ・これまでの薬業界は、一人のスーパースターがいれば売上げが確保されていたが、今後はバイオ、バイオシミラー、ホルモン、ゲノムなどが重要であり、それらの分野について、国や県の力で研究所を作っていただきたいと思っている。
- ・十数年前からバーゼルと交流を持っていたが、今回、FMIの富山版ができることを嬉しく思う。
- ・富山県医薬品業界の製剤技術は世界の最先端であるが、現在は、今後の投資など、色々な意味でタネがない。

- ・何とか5年間で骨格を作り、6年目から業界主導で本格稼働させたい。そのためには、高津先生のようなスーパースターといえる研究者を複数人集めることが近道かと思う。
- ・コンソーシアムの取組みは、うまく進めることが難しい。良い取組みになれば、他のコンソーシアムの参考にもなる。
- ・プロジェクトに直接関係するインターンシップ参加学生等だけでなく、例えば、難しいかもしれないが、高校生にもPRするなど、情報発信を工夫してはどうか。
- ・富山県は製剤技術が高く、プロジェクトを通じて、こうした強みをさらにブラッシュアップしていければよい。
- ・コンソーシアムの成果が見えれば、参画企業が増え、新たなプロジェクトへの挑戦も考えられる。成果の「見える化」を進めたい。
- ・(インターンシップ参加者に対して、) アルミ産業の魅力を伝えていきたい。
- ・産業界は利益が見えないと動かず、大学にはあまりそうした視点がない。両者が一歩ずつ歩み寄ることが必要。